2026年1月1日発行（1、4、10月の1日発行・年3回）通巻1185号

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟

ユネスコ

2026.1
vol.1185

当連盟では災害子ども教育支援を通じて能登の子どもたちに奨学金支援を届けている。奨学生のひとり、石川県能登町の中学生 濱本悠希さんは、ウエイトリフティング教室で練習に励んでいる。写真は昨夏の全国中学生大会の様子で、濱本さんは2位の成績を収めた。（P.4参照）

CONTENTS

1 会長新年挨拶

2 特集：震災から2年。
能登、復興への道のりは続く
●第81回日本ユネスコ運動全国大会in金沢
●災害子ども教育支援

5 TOPICS
●カンボジア寺子屋訪問記

7 新規加入会員のご紹介
お知らせ
●2025年度ブロック別ユネスコ活動研究会実施報告
●理事会報告

震災から2年を経た能登で頑張る子どもたちや人びとに思いを馳せたい

2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震。加えて、同年9月には記録的豪雨にも見舞われました。被災地ではいまも多くの人が仮設住宅で暮らし、いつも通りの日常が突然奪われた苦しみと向き合っています。学校現場でも状況は同じで、珠洲市のある小学校では、児童が毎日通る廊下の壁に大きなひびが残っています。また、中学校では校内の修繕工事の音が日々鳴り響くなど、授業が受けられるようになっても、子どもたちは震災の爪あとを感じながら学校生活を送っています。

今号の特集では、そんな復興途上にある能登の“いま”を伝えます。2025年10月に石川県で開催した全国大会では、奥能登の市町村から町長や地元の事業者らを招いてパネルディスカッションを実施。全国のユネスコ協会の会員が一堂に会し、能登の復興について考える機会となりました。（P.2参照）

さらに、発災の年から当連盟が継続して行っている「災害子ども教育支援」を通じた奨学金支援や学校支援の最新情報もお届けします。奨学金を活用し地元で学校生活を送る奨学生の声や、支援先の学校からの声を紹介しています。（P.3-4参照）

能登で頑張る地元の子どもたちや人びとの姿にぜひ関心をお寄せいただき、引き続き応援をよろしくお願いいたします。

きょういくで、あしたへいく。

UNESCO加盟から75年。「教育」を通じて、国際平和と人類の福祉の実現を目指す

公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟 会長

佐藤 美樹

明けましておめでとうございます。

本年は、日本のUNESCO加盟75周年を迎えます。UNESCOは戦後日本が初めて加盟した国連機関でした。1951年7月2日、パリで開かれた第6回UNESCO総会を経て、日本は60番目の加盟国になりました。敗戦国として占領下におかれていた中での出来事であり、このUNESCO加盟が国際社会への復帰の最初の場となりました。

この背景には、仙台に端を発した世界初の草の根のユネスコ運動が関係しています。民間から起こったUNESCO加盟運動は、政府、国会などを動かし、政府・民間の協力による一大運動に盛り上がり、加盟へとつながりました。それから現在にいたるまで、当連盟と全国のユネスコ協会・クラブは、企業や学校、行政、民間団体の皆さんと協力し合い、草の根の活動を続けてきました。

教育は、平和の構築、貧困の撲滅、持続可能な開発の推進というUNESCOの使命の中心に位置づけられています。

当連盟は、UNESCO憲章の理念のもと、SDGsのゴール4「質の高い教育をみんなに」を重点に置き、本年も引き続き活動してまいります。国内においては、教育機会から疎外される子どもたちを対象に「災害子ども教育支援」や「U-Smileプログラム」を実施し、国外においては、「世界寺子屋運動」や紛争地域における支援を通じて困難な状況にある人びとへの教育支援に取り組みます。

この先、UNESCO加盟80年、90年、そして100年を迎えたとき、世界がよりよいかたちになっていることを目指し、これからも皆さまとともにアクションを起こしていきたいと思います。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

特集

震災から2年。能登、復興への道のりは続く

第81回日本ユネスコ運動全国大会in金沢

災害からの「創造的復興」のため、私たちにできることは何かをともに考える

2025年10月18日（土）、第81回日本ユネスコ運動全国大会in金沢（主管：石川県ユネスコ協会）を開催し、全国から300人を超える会員が参加しました。今年は「日常」をテーマとし、災害からの「創造的復興」を目指して、持続可能なコミュニティの再構築に、民間ユネスコ運動として何ができるのかをともに考える機会となりました。創造的復興とは、被災地を災害以前の姿にただ戻すのではなく、新しい地域のあり方を創造する・災害に対して強靭なまちづくりを行うなど、よりよい状態にすることを目指す未来志向の復興の考え方で、東日本大震災や熊本地震でも提唱されています。

ディスカッションでは、地震により能登の過疎化が一層進んでいることが共通する課題としてあげられた

パネルディスカッションでは、地元の老舗酒蔵、志賀町長、輪島塗の塗師屋、ベンチャー創業者、防災士など、能登地域のさまざまな立場の方が登壇。災害発生直後から現在に至るまでの歩みを振り返り、課題と今後の展望についてそれぞれの見地から意見交換しました。日頃の備えの大切さ、避難所での男女格差の問題、孤立集落のさらなる孤立、事業再開の苦労や新たな挑戦などが実体験を交えて語られました。

（組織部）

pick up!

全国大会翌日にエクスカーション「能登応援旅」を実施！
～能登の“いま”を体感する2日間～

「大きな被害を受けながらも復興に向けて歩み始めている様子、その一方で復興が進んでいない様子、どちらも皆に見てほしい」―地震直後から被災地に物資を届けるなど、ユネスコ協会としても個人としても支援を続けている石川県ユネスコ協会会員の思いから、1泊2日の「能登応援旅」を実施しました。

七尾から穴水を結ぶ、のと鉄道の「震災語り部観光列車」では、参加者は車窓から能登の風景を見ながら、地震発生時に必死に乗客を避難誘導したことや、自身の家屋が全壊したことなど、語り部の話に耳を傾けました。また、バスでの移動中には、隆起による海水面の変化や、報道もされずに支援が遅れた地域の実状も目の当たりにしました。

その後、地震による火災で甚大な被害を受けた輪島の朝市通りを見学。観光名所だった朝市通りは更地になり、周辺には倒壊したままの建物が残っていましたが、一部の店舗は近隣の大型施設内で「出張輪島朝市」として再開していました。宿泊地となった和倉温泉では、いまも多くの旅館が休業しており、外壁が損傷したままの建物もありました。

復興への道のりはまだまだ続きますが、それでも能登地域の観光は少しずつ復活しつつあります。訪問先からは「観光バスが到着するとこちらも元気が出る。皆さんに能登の頑張っている姿を見てほしい」という声をいただきました。参加者からは、「話で聞くのと実際に見るのでは大違いで、被災地に実際に足を運ぶことの大切さを改めて実感した」「東北の被災地が思い出された。本当に来てよかった」などの感想が寄せられました。被災地を訪れることそのものが支援につながります。機会があれば、ぜひ能登を訪ねてみてください。

語り部列車では、震災の爪あとを目にすると同時に、被災後も変わらない美しい風景を車窓から見ることができた

朝市通り近隣のスーパーの一角では「出張輪島朝市」が開かれている

特集

震災から2年。能登、復興への道のりは続く

災害子ども教育支援

能登の子どもたちに、2年目の奨学金支援を行っています

多くの皆さまから「令和6年能登半島地震 災害子ども教育支援募金」にご協力いただき、心より感謝申し上げます。お寄せいただいたご寄付はすべて、３つのプログラム「奨学金支援」「学校支援」「ユース・ボランティア支援」に活用しております。被災地の子どもたちが安心して学び続けられるように、そして全国から駆けつけるユースたちの活動を支えられるように、一つひとつの思いをかたちにしています。

2024年度から3年間の「奨学金支援」は、今年度2年目の支援を届けています。奨学生たちや、「学校支援」を実施した学校からは、「支援のおかげでこんなことができました」といった喜びの声が続々と届いています。

（教育支援部）

プログラムの実績

■ **奨学金支援**
2024年度から3年間、一人あたり月2万円を給付（返還不要）
奥能登2市2町（珠洲市・能登町・輪島市・穴水町）の中学生64名を支援

■ **学校支援**
石川県内の学校34校・1園に対し、学校・保育園で必要な備品等購入資金を支援

■ **ユース・ボランティア支援**
石川県で復興支援ボランティアを行った8団体に対し、活動資金を支援

※2025年12月末時点

学校支援インタビュー

珠洲市立正院小学校の山野仁志校長に震災時の状況や当連盟の支援について伺いました

学校が地域の『あかり』となれるように

石川県珠洲市東部に位置する正院町。令和5年5月にも大きな地震が町を襲い、正院小学校では多くの備品が壊れ、散乱しました。半年かけてほぼ元通りにしたところで、翌年の元日に令和6年能登半島地震が発生。校内はあっという間に約500名の避難者で溢れたといいます。

冬休み明け、1週間遅れで再開した学校は、当初ほとんどが避難者の生活スペースに。そこで山野校長は、地域の避難所運営者や市の教育委員会と協力し、できるだけ早く子どもたちが震災前と変わらない学校生活を送れるよう、徐々に学校のスペースを確保し、授業時間を増やしていったそうです。校長は当時を振り返り、「子どもたちが“いつも通り”の学校生活を送れるようになったのは、いろんな方々の支援のおかげです。地域の皆さんも子どもたちを思いやり、本当によくしてくれました。子どもたちには、感謝の心を持つこと、地域のつながりを大事にしてほしいことを伝えています。これからは、学校が地域の『あかり』となれるよう、より強い結びつきを持っていきたいです」と話してくれました。

授業が再開したあとも、地震で壊れた備品などを計画的に補充し、子どもたちの学習環境を整えていきました。日本ユネスコ協会連盟の学校支援では、避難所となり汚れた玄関マットや、揺れで転倒して破損したモニター(授業で使用)などを購入しました。「ものがたくさん壊れて、あれがない、これがないという状況でした。何をするにもお金がかかるので、ユネスコさんの支援は本当に助かりました」。

子どもたちへは「『皆はもう十分頑張っている、ともに学校で学ぶことを楽しもう』と伝えています。このような状況下でも、夢を持つことを忘れないでほしい。この経験は必ずこれからの人生の強みになります」と言葉を寄せています。『明日を夢見てすすんで学ぶ正院小学校』というスローガンのもと、先生方と子どもたち、保護者、正院町の方々が一丸となって歩んでいます。

“夢”という言葉が好きで、「自分がどうなりたいか考えることが、“学びたい”という意欲につながる」と山野校長

奨学生
インタビュー

先生のような アスリートになりたい

能登町の中学２年生　濵本 悠希さん

記録更新を目指して

表紙でも紹介した能登町の中学生、濵本悠希さんは、隣の珠洲市に拠点を置くウエイトリフティング（重量挙げ）クラブ『SUZU DREAM CLUB（スズドリームクラブ）』に所属し活動しています。石川県はもともとウエイトリフティングが盛んで、悠希さんが練習を始めたのは小学4年生のときでした。いまでは生活の中心になっており、そのためにも中学校の相撲部で足腰と体幹を鍛えています。

「ウエイトリフティングは、重い重量を持ち上げられたときに大きな達成感があります。いまの目標は、クリーンアンドジャーク（最も重い重量を持ち上げるウエイトリフティングの種目）で記録を更新すること。自分の最高記録の2倍以上にあたる、200キロを持ち上げられるようになりたいです。クラブの憧れの先生お二人のもとで、これからも学び続けたいです」

地震の翌日、自宅までの帰り道の様子

能登半島地震が発災したとき、悠希さんは小学6年生。元日の挨拶回りで家族と親戚宅を訪れていて、地震に遭遇しました。揺れがあまりにもひどくて立っていられず、家族皆でその場に座り込み、お互いを抱え込むようにして耐えました。お母さま曰く「巨大なトランポリンに乗っていて、隣で跳ねている人がいるような感覚」だったそうです。本震後、悠希さんは家族とともに外へ出て、落下物から身を守るため道路の真ん中へ避難しました。日頃から学校やご両親に教わったことを生かし、冷静に行動できたと振り返ります。その日は車中泊をし、翌朝、普段なら10分の道のりを1時間かけて自宅へ。到着して目にした我が家は、津波の影響もあって大きく損壊し、現実を受けとめることが難しかったといいます。

それから2年を経て、線の細かった悠希さんは、ウエイトリフティングのおかげでどんどん逞しくなり、太ももは同級生に驚かれるほどの太さに。それに伴って制服はきつくなり、新しい制服が必要となっています。また、相撲部を含む大会などの遠征費のほか、ウエイトリフティングでは専用の靴も用意しなければなりません。

「いただいた奨学金でやりたいことを続けることができています。支援してくださった方々の気持ちに応えたいです。昨年の夏に行われた全国中学生大会では2位になりました（表紙写真）。表彰台に立ったとき、支えてくださった方々の顔が思い浮かびました」と悠希さん。

夢は、アスリートになること。その目標に向かって、日々トレーニングに励んでいます。

家族は「守ってくれて、守りたくなる存在」

濵本家は、明るいお母さまの「よし、行っちゃおう」という一言で、休日に車に乗り込んで旅行に出かけるほどの仲良し。悠希さんは、小学校とこども園に通う2人の妹を肩車することもある優しいお兄さんです。そんな悠希さんに家族について尋ねると「自分を守ってくれるし、守りたくなる存在です」との答え。家族を守るためにも、強くなりたいという気持ちが成長につながっています。お母さまが悠希さんに願うのは「ああすればよかった、こうすればよかったと後悔がないように、自分の人生を楽しんでくれること」。支えてくれる人たちの温かい応援を受けて、ひたむきに頑張る毎日です。

悠希さんが所属する「SUZU DREAM CLUB」の練習場。壁には「珠洲から世界へ!珠洲からオリンピックへ!」という目標が掲げられている

「SUZU DREAM CLUB」の浅田久美代表にお話を伺いました

浅田（旧姓：長谷場）さんは、世界選手権などの国際舞台で活躍し、重量挙げ女子日本代表の監督も務めた女子重量挙げのパイオニアです。岩手県釜石市出身で、結婚を機に珠洲市へ移住。東日本大震災と能登半島地震、２つの故郷で震災を経験しました。2012年から珠洲市でウエイトリフティングの指導を始め、地域に貢献してきました。「悠希さんをはじめ、子どもたちは本当によく頑張っています。その頑張りは地域に伝わり、皆を元気にしてくれます」と浅田さん。夫の浩伸さんとともに今日も子どもたちを見守り、愛に溢れた指導を続けています。

カンボジア寺子屋訪問記

2025年7月、日本ユネスコ協会連盟（以下、日ユ協連）の戦略広報担当である小林敬一理事が、カンボジアの寺子屋を訪問しました。今回は、近年開所した寺子屋と、すでに自立に向けて進んでいる寺子屋を訪れ、現地の状況を直接見て回りました。世界寺子屋運動の現地を初めて訪れ、「教育が人を幸せにすることを再認識した」という小林理事。そのレポートを紹介します。　（企画広報部）

“現地・現物・現実”で確認したカンボジアの「寺子屋」

日本ユネスコ協会連盟 理事（戦略広報担当）
古河電気工業株式会社 取締役会長 小林敬一

はじめに

古河電気工業株式会社（以下、古河電工）は以前より日ユ協連の維持会員企業でしたが、私の社長時代はそのことを知っているだけで満足し、申し訳ないことに、実際にどのような社会貢献活動をしているかについての認識はほとんどありませんでした。古河電工の会長となり、日ユ協連の戦略広報担当理事を拝命したいま、上記の反省を踏まえ、まずは日ユ協連の活動を“現地・現物・現実”で確認をすることに努めています。

今回、カンボジアにおける「世界寺子屋運動」をこの目で確認する機会をいただきました。その結果、①義務教育であるにもかかわらず家庭の事情で中途退学を余儀なくされた子どもたちや、さまざまな理由で識字ができない大人にとって、学ぶことが「喜び」になっていること。②寺子屋を中心に持続可能を目指したエコシステムが形成されていること。この二つがわかりました。近現代に不幸な出来事が多かったカンボジアにおいて、教育が次へ進む原点であり、人を幸せにすることを再認識しましたので、以下報告します。

寺子屋を訪問し、生徒たちにとって学ぶことが「喜び」になっていると実感

最初に訪れたポペル寺子屋は、村の集会所と併設する形で2020年に設立されました。ここでは、11～16歳を対象とした初等教育復学クラスと、16～35歳を対象にした3ヵ月間の職業訓練クラス（PCやスマートフォンの利用）が行われていました。職業訓練の教室では赤ん坊を抱いた若い母親が、廊下から授業を熱心に聞いており、学びたいという強い意志が感じられました。ポペル寺子屋の代表者から寺子屋の概要を説明していただき、地域の皆さんも会いに来てくださいました。私からは「私の祖母は十分な教育を受ける機会がなく、字がよく書けなかったが、子どもや孫にはしっかりと勉強させてくれました。その結果、私も大学院まで行かせてもらい、自分の好きな仕事に就くことが出来ました。皆さんも教育でしっかりと将来の夢をつないでいってほしい」とお伝えし、皆さんから大きな拍手をいただきました。

また、ポペル寺子屋に通う13歳の女子生徒と男子生徒の家庭を訪問しました。二人ともそれぞれの家庭の経済的事情により、公立学校を中途退学したとのこと。男子生徒は算数が好きで「将来は警察官になりたい」と我々に語ってくれました。女子生徒は「寺子屋で学ぶことが一番楽しい」と言い、その澄んだ目には涙があふれていました。私は「笑顔を続けていけば、次の扉が開く」と励ましの言葉をおくりました。

さらに、ポペル寺子屋のサテライト教室である夜間教室も訪問しました。高床式民家の床下部分で、薄明かりを頼りに月～土曜日18～20時に開催されている識字クラスです。15～45歳の女性を中心に、20名以上が参加していました。生徒の皆さんは、恐らく炎天下での労働の後にもかかわらず、明るく元気に識字に取り組んでいました。

ポペル寺子屋から遠い地域の人びとが通うサテライト教室。夜間の識字クラスは母親が多いため、小さい子どもたちが周りで遊んでいる。1歳くらいの妹を5歳くらいの姉が面倒を見ている姿も

日ユ協連の支援から自立し、持続可能な運営を行う寺子屋も訪問

次に、2012年に設立され、現在は支援に頼らず自走を開始したリエンダイ寺子屋を訪問しました。訪問時には、カンボジア政府との連携により新しく導入された「2年間で中学校修了資格が得られるクラス」で歴史の授業が行われていました。その後、この寺子屋の特徴である「収入向上プログラム」の受講者が運営するトウモロコシとスイカの畑を訪れました。寺子屋の基金を農作業に活用し、その収入の一部を寺子屋運営費に充てることで、自立した運営が可能になっているとのことです。つまり、日ユ協連の組織的・金銭的な支援から自立し、自らマネジメントする持続可能な一種のエコシステムを形成していると言えます。私はこの取り組みに深い感銘を受けました。

おわりに

今回、日ユ協連がカンボジアで進めている「世界寺子屋運動」の“現地・現物・現実”を知ることができ、教育が人を幸せにすることを再認識しました。多くの皆さんに是非この状況をご理解いただき、寺子屋の活動に賛同いただければ幸いです。

収入向上プログラムの受講者が運営する畑のスイカを試食する小林理事

プロフィール

小林 敬一/こばやし けいいち

北海道出身。早稲田大学大学院修了。大学の研究室で見た溶けた銅の美しさに魅せられ1985年古河電工に入社。無酸素銅の研究開発に始まり、日光伸銅工場製造部長、原価低減部長、巻線事業部門長、銅条・高機能材事業部門長、グローバルマーケティングセールス部門長などを経て、2017年代表取締役社長、2023年取締役会長に就任し現在に至る。同年、日ユ協連の理事に就任。学生時代はアメリカンフットボールに打ち込み、現在はゴルフと筋力トレーニングが趣味。毎朝3kmのウォーキング、ベンチプレス等のマシントレーニングをしてから出勤する。

富士電機株式会社　〒141-0032 東京都品川区大崎1-11-2（ゲートシティ大崎イーストタワー）TEL.03-5435-7111

◆新規加入会員のご紹介◆

維持会員

株式会社 関電工　取締役社長　田母神 博文

弊社は、「人間第一」の社是のもと、社会インフラの維持・構築や脱炭素社会の実現に取り組んでおり、協会連盟の目指す平和で公正な社会づくりにも貢献したいと考えています。

能美防災株式会社　代表取締役社長　長谷川 雅弘

弊社は、永年にわたり、「防災事業のパイオニアとしての使命に徹し、社会の安全に貢献する」ことを社是としておりますが、誰もが笑顔で暮らせる社会の実現に向けて取り組んでまいりたいと思います。

日本ユネスコ協会連盟からのお知らせ

2025年度ブロック別ユネスコ活動研究会 実施報告

2025年9～11月にかけて、全国各地でブロック別ユネスコ活動研究会を実施しました。

北海道ブロック
テーマ：平和～花輪が輪になって広い世界を囲んだら～
開催日：11月15日(土)
開催地：江差町文化会館(北海道江差町)
主管：江差ユネスコ協会
参加者数：約90名

東北ブロック
テーマ：地域からユネスコの心を育む人づくり
開催日：11月8日(土)
開催地：東京第一ホテル新白河(福島県西郷村)
主管：白河ユネスコ協会
参加者数：約160名

関東ブロック
テーマ：次代につなげよう 平和の心―戦後80年、今できることは―
開催日：9月27日(土)
開催地：深谷市民文化会館(埼玉県深谷市)
主管：寄居地方ユネスコ協会、深谷地方ユネスコ協会
参加者数：約300名

中部東ブロック
テーマ：世界はどこへ向かうのか、向かう先は？～次世代につなぐ未来への道しるべ
開催日：11月22日(土)
開催地：鎌倉パークホテル(神奈川県鎌倉市)
主管：鎌倉ユネスコ協会
参加者数：約100名

近畿ブロック
テーマ：「平和の文化・持続可能な地域づくりをめざして」
～学び合い・つながり合いで、民間ユネスコ活動を広げ深めよう～
開催日：10月26日(日)
開催地：長浜文化芸術会館(滋賀県長浜市)
主管：長浜ユネスコ協会
参加者数：約230名

中国ブロック
テーマ：ユネスコの視点から若者と考えるまちづくりの未来
開催日：11月8日(土)
開催地：倉敷市芸文館(岡山県倉敷市)
主管：倉敷ユネスコ協会
参加者数：約120名

四国ブロック
テーマ：瀬戸内圏の自然環境保護とユネスコ・ジオパークについて
ーSDGs達成に向けた地域ユネスコ活動のあり方
開催日：11月1日(土)
開催地：レクザムホール(香川県高松市)
主管：高松ユネスコ協会
参加者数：約110名

九州ブロック
テーマ：歴史に学び、沖縄の地からユネスコ活動の明日を！
開催日：11月8日(土)～9日(日)
開催地：那覇商工会議所(沖縄県那覇市)
主管：沖縄県ユネスコ協会、沖縄でいごユネスコ協会
参加者数：約80名

理事会報告

■第573回理事会
11月15日（土）、オンラインにより開催した。

Ⅰ.決議事項
1. 理事会資料の共有ルール策定について
2. 協会連盟のコンプライアンス遵守体制構築について

⇒審議の結果、原案どおり決議された。

Ⅱ.協議事項
1.部会等からの報告・提案事項等
(1)財務部会
(2)U－Smile部会
2.ユネスコ・アジア文化センターとの合併検討について

⇒協議の結果、いずれも承認された。

Ⅲ. 報告事項
1. ブロック代表理事会議からの報告
2. 担当理事からの報告
（戦略広報）　小林理事
（ユース施策）　名須川理事
3. 青年理事報告
4. 2025年度中間決算報告
5. 2025年度上期情報セキュリティ監査報告
6. 2025年度 事業進捗報告
7. 代表理事の職務執行状況報告
(2025年9月13日～11月14日)
8. 後援・共催事業
9. その他

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟は、UNESCO憲章の精神に共鳴した人びとによって1947年、世界にさきがけ仙台で始まった、民間ユネスコ運動の日本における連合体です。現在全国に約270のユネスコ協会・クラブがあります。会長：佐藤美樹　副会長：永野博　理事長：鈴木佑司

ユネスコ
2026年1月1日発行 通巻第1185号（1、4、10月の1日発行・年3回）●発行／公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階　TEL 03（5424）1121　FAX 03（5424）1126　発行人：鈴木　佑司